

がん悩み、支えて40年

日本のがん患者団体の草分け「あけぼの会」(1978年創設)を支えてきたワット隆子会長(78)が、10月14日に東京都内で開く全国大会を機に勇退する。がんが「不治の病」とされ、患者本人への告知がタブーとされた時代から40年。がん医療も患者の意識も大きく変わった。ワットさんは活動に一区切り付け、一線を退く。



ワット隆子さん

【高野聡】

「あけぼの会」会長勇退へ

ワットさんは77年2月、37歳で乳房全摘手術を受けた。再発の不安の中、同じ悩みを持つ人は多いと考え、毎日新聞に「乳がん体験者が集う場ができれば、乳がんで悩む人の助けになる」と投書。78年5月に掲載された。読んだ人から次々とワットさんに連絡が届き、同年10月に患者30人であけぼの会が発足した。本人にがんとは伝えずに手術が行われていた時代。会の案内を病院に置こうとしたら「当院ではがん告知をしていないから」と断られたこともある。それでも患者は、周囲の

告知が常識「別世界」

空気で自分がかんであることを感じ取っていた。入会資格を「自分がかんと知っている人」としたが、入会希望が相次ぎ、翌年4月には400人を超えた。多くの人が独りで悩み苦しめ、明かりを求めていた。恒例行事は親睦の温泉旅行。当時の乳がん手術は全摘が主流で、体を見られたくなくて温泉に行けない会員が多かった。旅館と交渉

し、浴場を借り切った。手術後のむくみなど治療の悩みに応えるため、大学教授を招き講演会も開いた。「相手が偉い人とか何も知らなかったから堂々と頼みに行った」と笑う。いつ死ぬか分からない、会の形を作り上げれば誰かが続けてくれる。そう思い全身全霊で打ち込んだ。「それが生きる力にもなった」。組織は全国に広がり、ピーク時の会員は4500人を超えた。

90年代に入ると医師が患者に十分な情報を与え、治療に同意を求める「インフォームドコンセント」の考え方が浸透。医師と患者が情報を共有して治療を決める時代になった。「日本人はがん告知を受け止められないと考えられていたが、今は自分で受け止めている。まるで別世界」と振り返る。患者団体のあり方も変わった。以前は患者同士が集まることで精神的に落ち着く効果があったが、今はそれよりも医学的情報が求められる。情報入手にネットも欠かせなくなった。あけぼの会は今後、各地の組織が主体となって活動する。勇退を飾る40周年記念大会は、10月14日正午、千代田区の有楽町マリオン・朝日ホール。乳がんの専門医が講演する。無料。問い合わせは同会(03・3792・1204)。

編者(手紙) 1978年5月29日、毎日新聞朝刊に掲載されたワットさんの投稿

定期の検診も慣習化した

旧暦の「中秋」(8月15日)にあたる24日、急ピッチで建設が進む2020年東京五輪